◇1

「日本の経済は両足を地につけていず、竹馬にのっているようなものだ。」

頭をかきながら新聞を畳み、寝床代わりの長椅子に軽く投げた。昨日の酒がまだ少し残っているらしく、体が重い。光の入らない店内までよろよろと進み、スツールにもたれるようにして腰掛けた。胸ポケットからよれた金鵄を――いや、もう言い換えは不要だった――バットを一本抜き取り、とんとんとカウンターで端を叩く。客の使い差しらしいマッチを手繰り寄せ、しゅっと擦ると、夜の女の素面を暴くような光がカフェーの中を一瞬照らした。箱に書かれた「まあめいど」のレタリング文字が浮かんで、薄闇に消える。深呼吸をするように大きく煙を吸いこんで、深々と吐いた。梅姐にはおやじくさいと嫌がられる仕草だが今は誰がいるでもない。

改めて肘をついた左手に頭を預け、煙を味わう。ゴールデンバットは濃さ薄さにむらがあるが、今日のはアタリだ。

「……」

煙草は美味くても、ため息は重くなる。日本の景気がアメリカの支援に凭り掛かっているのは周知の事実。かといって今竹馬を外したら不景気になるのは目に見えている。第一次世界大戦のような、対岸の火事かつ漁夫の利となる戦争でも起これば別だろうが……。菊は頭を振った。景気の行き先など考えてもどうにもならない。

梅姐がひっそりとやっているこのカフェー「まあめいど」に、彼女が店の準備を始める夕方まで店の中に居座らせてもらう代わりに、前夜の片付け掃除は菊がすることになっている。けれども梅姐は、アルコールのついたグラスをそのままにしておくと虫が出るといって、水回りを全部綺麗にして引き上げることが多く、菊のすべきことは大して残っていない。せめてもと、カウンターとドアは光が出るまで磨き上げる。ステンドグラスみたようなはめ殺しの窓は隈無く磨き、地上までの階段は丁寧

に水で清める。
「あっ、本田さん」
掛けられた声に首をよじると、くっきりと化粧し髪を巻いた女が数段上の地上から手を振っていた。もう片方の手は、余所を向いたままの金髪の腕に絡んだままだ。また男が変わったなと思いつつ、愛想良く会釈を返す。
まだ春も名のみだというのに、鮮やかな橙色のワンピースから腕も足も半ば以上露出させている。たくましいことだと寒がりの菊は思った。
「あのね、この前のラブレター……」
ちらりと隣を見る。なるほど、聞かれたくないのだろうと菊は思った。
「ありがと。おかげで上手くいきそう」
「それは良かったです」
指で環を作って見せる女に微笑みを返す。女は男から手を離し軽く階段を下りてきて、背後に見られないようにしながらくしゃくしゃの紙幣を菊に握らせた。毎度、と菊はお辞儀した。
労働に成果が伴えば、それなりに嬉しい。それが男との駆け引きに使い捨てられる売文だったとしても。彼女にとってそれが恋なのか商売なのかは分からないが、菊にとってはまごう事なき商売だ。
何かを考えているようであった男が突然振り返った。太陽を受けて金髪が光る。どきりとした。
「やあ。君は翻訳家なのかい？」
いきなり英語で尋ねられた。男は陽の中にいるせいで、顔がよく見えない。しかし快活な声の響きからも人となりが見えるようだった。いかにも明るい、若い、アメリカ人。
「……いえ」
「違うんだ？ 彼女のラブレターを英語に直してあげた人なのかなと思ったんだけど」
爽やかな顔で、彼女の恥じらいを踏みつけるようなことを言う。
「今、そんな会話してなかったかい？」
思わず瞬きをした。では彼は日本語がわかるのだろう

か。
「頼まれれば、そして対価と折り合えば、なんでもやります。特に英訳に限りません」
「何でも？」
「ええ」
「例えば、円周率の小数点以下十一桁目を教えてほしい、とかでも？」
「三・一四一五九二六五三五九、だから九です」
男はヒュウと口笛を鳴らした。
何を遣り取りしているのだろうと顔を右に左に振っている女に「私が何でも屋だという話です」と言うと、腑に落ちたような、しかし僅かばかり不安そうな顔になった。可哀想な気もするが、彼女の英文が自力ではないことは、この兵士には筒抜けらしい。もっとも、文自体菊の作とまではばれていないのかも知れないが。そして、どうあれ男を銜え込むことはできたのだから、経緯はもう気にする必要もないだろう。
「……それにしても本田さん、本当に何でもできるのね。あんなにぺらぺらしゃべれるなんて」
はは、と菊は笑った。こういう商売女(ひと)たちは、商売を離れた時に妙に少女びた顔をすることがある。まるで角帽を眺める女学生のような純真な顔。不意打ちのせいで、菊も思わず照れる。
「器用貧乏ってやつで、どれも半端で……」
「ねえ」
会話を容赦なくぶった切って、男は階段を下りてきた。
「オンダって言った？」
「ホンダです」
ずい、と顔を近づけられ、はっとする。
陶器のように白い肌に薄い金の靄をかけるような産毛が散っている。線がなぞれるほどくっきりした睫が水色の瞳を囲っている。
さっきまで今の東京によくいる陽気で人なつっこいヤンキーでしかなかった男は、いきなりその造形を以て菊の前に立ち現れた。
うつくしい、という言葉では足りない衝撃に心を揺さ

ぶられ、菊は思わずみぞおちに手を当てた。と、いきなりその手を掴まれ、ぶんぶんと上下に振られる。
「イエス!! ミスター・ホンダ、宜しくなんだぞー」
「はい？」
「俺はアルフレッド・F・ジョーンズ。カスタマーなんだから俺にも愛想よくしてくれていいんだぞ」
「……はあ」
彼女にしたみたいにね！ と男は人差し指をたてた。何が要求されているのか分からず、菊は瞬きした。そもそも客ではない。
「おっと、それは対価払ってからだな。はい」
アルフレッドは手をポケットに突っ込み、無造作に取り出したチョコレートの板を菊の手に握らせた。
「さっき十一桁目を教えて貰ったからね！」
ぱちんと音が出そうなほど大きく、アルフレッドは片目をつぶって見せた。粋な仕草のつもりなのだろうが、むしろ子供っぽく見える。実際若いのだろう。せいぜい……二十の四か五か。この年代のアメリカ人とはこういうものなのだろうか、やけにテンションが高い。浮かれているようにさえ見える。
手元の包み紙に目を落とした菊に、アルフレッドはまたねと手を振って階段をあがっていった。女が慌てて腕にすがりつく。そうして半身振り向いて、真似たようにまたね、と片目をつぶった。
たくましいことだ、と再び菊は思った。彼女が「また」菊の客になるのは、今縋っている相手を捨てたか捨てられたかした時だろうに。
商売として考えるなら、回転が速い方がメリットは大きい。菊にとってはもちろん、多分彼女にとっても。オンリーとして囲われれば安定はするかもしれないが、そうやって子供を産まされ、挙げ句捨てられたひとたちを菊も女も山ほど見てきた。命や人生に関わることが、数年間の非日常として異国暮らしを楽しもうとする米兵たちに消費され――簡単に忘れ去られる。
そんなものだと諦められるなら、女のようにせいぜい図太く、強かに相手に合わせて、金蔓を掴みかえながら

生きるのが上策だろう。
はあ、と菊はため息をついて階段を下りた。
看板をもう一度だけ拭き上げ、菊は半地下の暗い店内に戻った。昼光に慣れた目にはほとんど像が結ばれないが、問題は無い。足が覚えた感覚でカウンター席に辿り着き、スツールに座る。そのまま上体をカウンターに投げ出した。眩しすぎるものを見るのは目に悪い。
しばらく突っ伏していたが、やがて菊は押しつけられた板チョコを一かけ割りとった。対価と言うには子供だましだが、実際、学校に行っていれば誰でも言える程度のこと。安いと文句をつけられることでもない。
「あま……」
菊は眉間に盛大に皺をたて、また額をカウンターにつけた。

2◇

東京地区憲兵司令部(Provost Marshal. s Office Metropolitan Tokyo Area)は築地にある。
もとは経理学校だったとかで、建物内はこぢんまりとしていながらも使いやすい。朝の国旗掲揚（勿論星条旗のだ）と点呼の後、各下士官は市内パトロールなどに出かける。磨き上げた靴に撫でつけた髪。ぱりっとした姿そのものが日本人に対する優位性の誇示だとされているから、誰も身繕いには余念が無い。群がる子供に菓子を配ってやるのも対日宣撫工作の一環だから、ＰＸでチョコレートなどを補填する兵も多い。ＰＭＯはＧＨＱ直属で、参謀第二[G2]部との繋がりも強い。命令から読み解けば自分たちに何が期待されているかは無言の内に分かるのだろう。「真面目なお巡りさん」は、いつでも「命令厳守の工作員」になる。
今年横滑り配置でＰＭＯに所属することになったアルフレッドは、そういう周りのＭＰ達のエートスを持ち合

わせていない。別にそうなりたいというのではないが、今のように一日机に座る身になってみれば、多少街中に喧噪があるとしてもパトロールにでも回してくれれば良いのにと思ったりもする。市中を歩き回るなんて准士官のすることじゃないという話なんだろうが、紙の束を相手にするより街行く誰かを助けていた方がいい。

「柄じゃないよ、もー……」

仕入れたドーナツとコーヒーを手に、資料室に入る。近年の犯罪について概況報告し傾向を分析せよというのが与えられた任務だったが、正直それは憲兵の仕事か？とうんざりする。

参考資料として渡された、前年の犯罪報告書には光クラブの説明がある。現役東大生を社長とする闇金融で、派手な広告や耳目を引く経営陣で大きく商売を張ったが、だから物価統制令に触れ、社長は自殺、会社は解散した。

望みつつ心安けし散るもみじ　理知の命のしるしあり

けり――社長の遺書を読み返しつつ、アルフレッドはため息をついた。民政局（GS）がこの犯罪を戦後派（アプレゲール）思想の象徴と見たてているのは分かるが、別に金貸し自体は犯罪じゃない。法令がある以上ヤミは犯罪、それは晴れ着を農村に持っていって生きるための米や芋に変えるのが犯罪であるのと同じことだ。日本経済が力を取り戻せば価格統制が外れて犯罪でなくなる、その程度の相対的な話だ。

G2だかGSだかが、互いとの抗争のために情報収集したいのだろうけれども、憲兵は公安ではない。単に犯罪者を捕まえればいい筈だ。いくら日本の警察と協力関係にあるからといって「日本人の思想傾向」なんて読み取れる訳が無いし、おそらくあぶり出そうとしている米軍内左翼分子は憲兵に掴まるような下手は打たない。

「うーん」

大きく伸びをすると、背もたれがぎっと鳴った。

もっと分かりやすい犯罪がいい。ひったくりをその場で追いかけ、取り押さえるような。銀行強盗の立てこもるビルに窓硝子を蹴り割って侵入するような。救出したヒロインに呼び止められても「仕事だからさ！」とウィ